五等分の未来をビルドする！

夢の防人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最初に言っておく！かなり見切り発車である！

そんなわけでビルドと五等分の花嫁がベストマッチしちゃったわけで自己満足ですがどうぞ。

おっと、ただし原作は読んでるけど単行本派だから一部キャラの口調とか間違ってたらごめんなさい。

あ、三玖好きです。

目次

序章 ―――――――――――――――― 1
一話　誕生！五等分の法則！ ―――――――――――――――― 3

序章

この世界っていうのは不思議なもんでさ。
ときおり奇跡っていうのが実現することがある。物理法則とかそんなの関係ないやつ。
その奇跡っていうのは、偶然って言い方もあるそうだ。
偶然いいことがあった。偶然悪いことがあった。
この偶然の出会いは追い風か？逆風か？

この物語は、本当の物語とはかけ離れた時間。
一人の正義の味方と、一人の不器用だけどまっすぐな男子高校生と、個性豊かな5姉妹の
時折笑って、泣いて。そんな物語。

・・・閑静な住宅街。の中にある少し大きめの公園を歩く女性。
ショートカットでどこか大人びた彼女・・・〔中野一花〕は家族が待つアパートに帰る途中だった。
「うわー・・・もうこんな時間になっちゃった。明日学校もあるし早く帰らなきゃ。」
こんな大人びた容姿だが、花の女子高生。それと女優の卵。二足のわらじを履いている彼女は、多忙だ。今日もドラマの撮影でこんな時間まで帰れなかった。
・・・そう、こんな場所を通らなければ。
「あれ？・・・・気のせいかな。」
ふと後ろから物音がした彼女は後ろを振り返る。街中とはいえこの時間の公園は人通りがないに等しい。・・・そう、人は。
「えっ・・・・」
彼女の目の前に動物・・・いや、異形の怪物が現れた。まるで待ち伏せしていたかのように。
「な、なにこれ・・・っ！」真っ先に逆方向へ逃げ出す一花。そのとき

だった。
『鋼のムーンサルトォ！ラビットタンク！イエーイッ！』
空中から目の前に現れた鋼鉄のボディ。赤と青の怪人が目の前に現れた。
呆然とする一花を見るとすぐに怪人同士が激突する。パニックになっている一花でも
赤と青の怪人が自分を守ってくれているのはすぐにわかった。
そして自分を襲った怪人がひるんだのを確認したとき。
「早く逃げないとあぶないよ。ほら、あっちあっち。」
守ってくれている怪人が自分に向けて話しかけてきた。
「わ、わかってるけど腰抜けちゃって・・・」
「あー・・・ならしょうがないっ！」
怪人は腰のレバーを何回も回し始めた。するとどうしたことだろう。公式が相手を拘束したではないか。
『レディ？ゴーっ！ボルテックフィニッシュッ！』
その怪人は公式に合わせるようにキックをすると、相手は爆発・・・しながら何かを回収していた。
「んっ、回収完了。で、怪我ない？」
「だ、大丈夫・・・それより、あなたは・・・」
「ビルド。仮面ライダービルド。作る・形成するって意味のビルド。以後、お見知りおきを？」
そう言い残すと、ビルドは街の中へと消えていったのだった。
・・・私は、そのことを姉妹に話したけれど誰にも信じてもらえなかった。・・・けど、あの声どこかで聞いたような・・・

一話　誕生！五等分の法則！

昼休みの食堂。
「焼肉定食。焼肉抜き。」
と前のやつがお決まりの注文をする。まったく、こいつはいつもどおりだな。
「おばちゃん、ハンバーグ定食。後肉じゃがとプリン二つ。あ、支払い僕で。」
「あっ・・・って、なにすんだよ光。」
「風太郎さ、いい加減食事にバリエーション増やせって。そのうち倒れるし、飯食いたいならうち来いって前から言ってるだろ？」
目の前の黒髪でどこかぱっとしない男子・・・上杉風太郎に僕はそっとため息。
「ただでさえ家庭教師のバイトやってるとはいえその食事見たら大変なのはわかるし。・・・ほら、らいはちゃんつれて今日家来い！」
「ほんとに急だよな。」
学年主席、だけど融通が利かないこいつとは小学生のころからの昔馴染み。だからかな、こいつが僕といるときだけは少しくだけた感じになるの。
「ほら、たまには食え。俺のおごり。」
「・・・出世払いでな。」
ほら、うまそうに食ってんじゃん。
「あれ、風太郎君が一人じゃない。」
後ろから聞こえてきた声。どこかで聞いたことが・・・あっ。
「あれ？始めましてだよね？」
「ど、どうも・・・」昨日助けた女の子じゃねぇかぁ!?
え、確かに見たことあると思ったけど！
「ああ、こいつは如月光。俺の幼馴染なんだ。こっちは中野一花。俺の生徒。」
生徒？
「あっ、家庭教師してるっていってた・・・」

「そういうこと～。ここ座るね？」
　僕の向かいに座る一花さん。・・・明るいところで見るとやっぱりきれいな人だった。
　って、この人どこかでみたような。けどこんな美人、忘れるわけないし。この目の前のガリ勉と違って。」
「聞こえてんぞ。」
「ふふっ、お姉さんのこと？ありがとねっ。」
　おや、どうやら聞こえてたらしい。なんかむかつくしあいつの焼肉一枚食ってやる。
「で？一花はなんでこんなところにきたんだ。今日の家庭教師は休みのはずだろ？」
「それもなんだけどー・・・実は昨日襲われちゃって。変な怪人みたいのに。」
　怪人・・・昨日・・・
「怪人？それって都市伝説みたいなやつだろ。疲れてたんじゃないのか？」
「そうじゃないよ！・・・ほんとに襲われて。そしたら赤と青の半分こ怪人が助けてくれたの！」
　・・・あ、ああっ！
「？どうしたの？急に立ち上がったら危ないよ？」
「あ、あははー、なんか面白そうなこと向こうでやってるって思ったらまったく別だったみたいで・・・」
　昨日助けたのこの人かー!!なんてこった、どこかで見たことあると思ったらこの人か！
「そしたらさ、その場にこんなマッチがあったんだけど。ねっ、風太郎君知ってる？」
「このマッチ・・・〈アルストロメリア〉？確かこの店って。」
「ぼ、僕の家だなー、か、怪人がそんなところにいたなんてー」
「なんで棒読み？」
　しまった、回収忘れてた・・・！どうする？二人にはビルドのこと話せないしそれ以前に一花さんの視線がすっごくあれなんだけど！

「私としては、一度は助けてもらえたしやっぱりお礼もいいたいんだけど・・・ね、今日行っちゃダメ？」

こ、こんなこと言われたら

「ど、どうぞー・・・」

ｏｋするしかないよなぁ・・・